

(2) 成果指標評価表

柱	1 社会環境
分野	A 大気・ばいじん
ビジョン	きれいな空気の中で暮らせるまち

成果指標1 降下ばいじんの量 (t/km²・月)

年度	市内平均	北部平均	南部平均
基準	4.4	3.3	5.4
H17	4.6	3.4	5.9
H18	4.8	3.5	6.2
H19	4.8	3.5	6.1
H20	4.7	3.2	6.2
H21	4.2	2.9	5.6
H25	4.1	2.9	3.5

主な事業

大気汚染常時監視
降下ばいじん等調査
公害防止協定による立入り調査
及び防止対策の指導

計画通りに成果が上がっているか

目標達成

順調

順調でない

成果指標の分析

平成21年度の降下ばいじん量は、市内平均4.2 t、北部平均2.9 t、南部平均5.6 tで前年度より減少した。臨海部企業は対策を実施しているが、発生原因と思われる対象が多いこと、発生をなくすための技術に限界があること、気象条件の影響などから微減傾向である。

成果指標2 大気汚染基準値の達成率 (%)

年度	達成率 (%)
基準	73
H17	75
H18	80
H19	75
H20	80
H21	80
H25	90

主な事業

大気汚染常時監視

計画通りに成果が上がっているか

目標達成

順調

順調でない

成果指標の分析

事業所への総量規制、自動車排ガス対策等により、21年度は二酸化硫黄・二酸化窒素・浮遊粒子状物質は環境基準を達していたが、光化学オキシダントは4局全てで未達成であった。光化学オキシダントについては、発生メカニズムが複雑であり改善が進んでいないため、全国的にも達成率は0.1%程度であり、効果的な対策がないのが現状である。

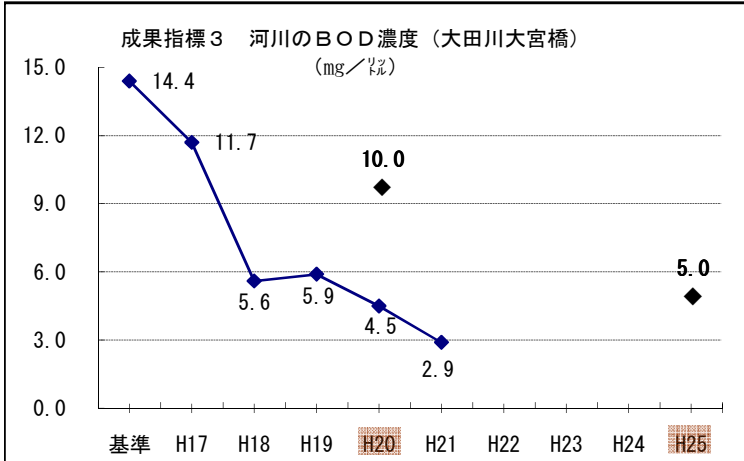
成果が向上する余地（可能性）は？ 大 中 小

成果向上のためにすべきこと、次年度への取り組み方針

降下ばいじんは南部で多いため、発生原因と思われる分析を進め、引き続き企業に対して粉じん対策等、環境対策を指導していく。

大気汚染基準値では、現在光化学オキシダントの効果的な対策はないが、18年度から始まった揮発性有機化合物（VOC）を減らすための新たな仕組み等、関連各機関における総合的な対策を取り組んでいく。

柱	1 社会環境
分野	B 水質
ビジョン	川や池を身近に感じて暮らせるまち



主な事業

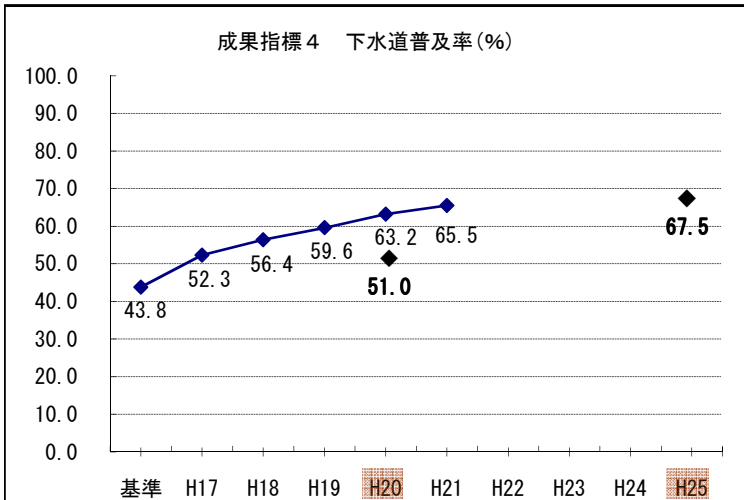
河川の水質調査(8箇所、年4回
大宮橋のみ年8回)
河川・ため池水質浄化事業

計画通りに成果が上がっているか

- 目標達成
- 順調
- 順調でない

成果指標の分析

河川の水質調査は、年8回の平均値のため季節や天候に左右されるが、21年度は全般的に数値は改善傾向になっている。その理由は、下水道の整備により生活排水の流入が減少したこと、大田川上流において環境浄化微生物の普及により生活排水の浄化が進んできたこと等による。



主な事業

污水管渠整備事業

計画通りに成果が上がっているか

- 目標達成
- 順調
- 順調でない

成果指標の分析

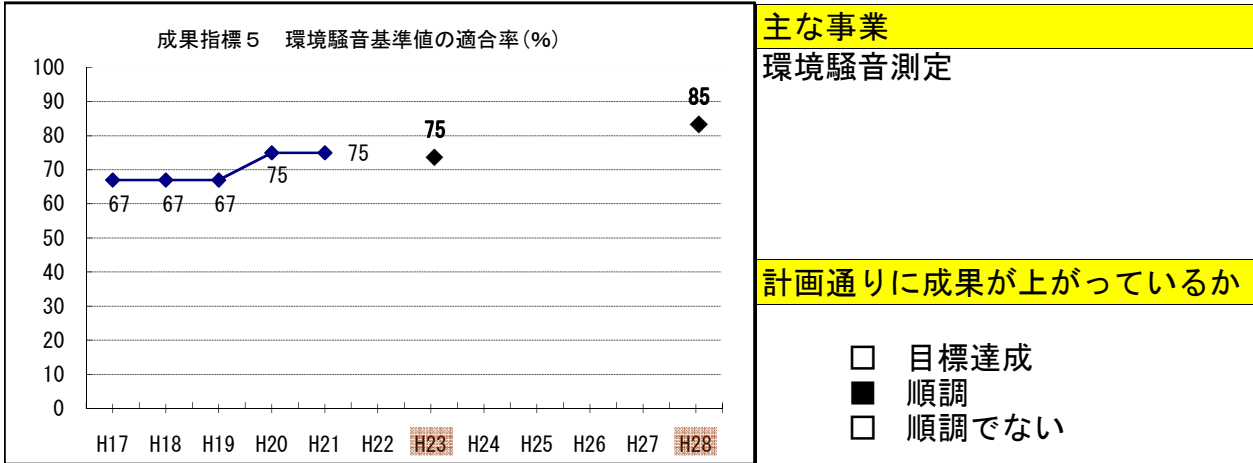
平成21年度の下水道普及率は前年度に比較し、2.3ポイント増加し、65.5%となった。名和町、加木屋町で整備済面積が増加したことによるもので、25年度の目標値達成に向けて着実に成果はあがっている。

成果が向上する余地(可能性)は? 大 中 小

成果向上のためにすべきこと、次年度への取り組み方針

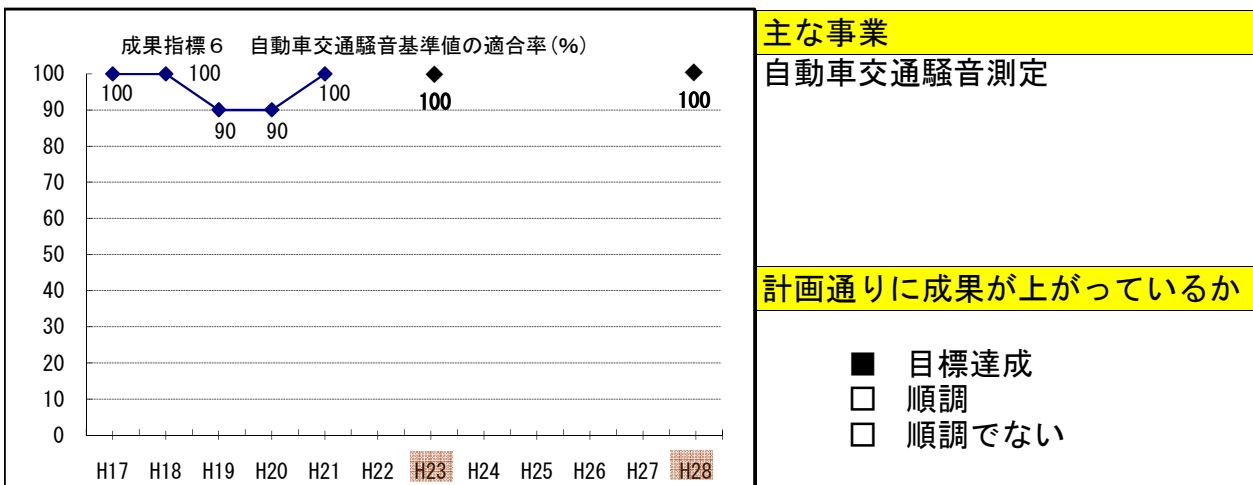
河川の汚れは生活排水によるものが大きいため下水道の整備が向上の可能性となる。下水道整備については、污水管渠整備には多大な経費を要するため、一度に成果を向上することはできないが、事業認可内の面整備工事を進めていく。

柱	1 社会環境
分野	C 騒音・振動
ビジョン	静かでおだやかに暮らせるまち



成果指標の分析

環境騒音は、市内6地点で調査を実施している。21年度は、昼間はすべての測定点で環境基準を達成したが、夜間は3地点で達成できなかった。



成果指標の分析

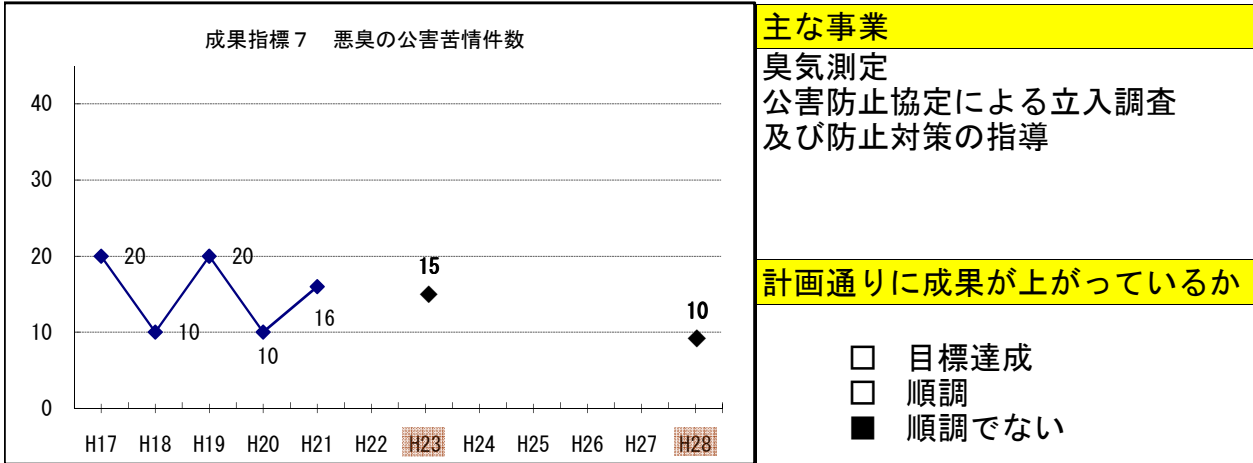
自動車交通騒音は、市内5地点で調査を実施している。平成21年度は昼間、夜間においてすべての地点で要請限度を達成した。

成果が向上する余地（可能性）は？ 大 中 小

成果向上のためにすべきこと、次年度への取り組み方針

環境騒音が夜間に超過していることから、交通量の増加に伴う暗騒音の増が原因と考えられる。直接的な対策は難しいが、環境にやさしいライフスタイルに見直すよう啓発活動を推進する。

柱	1 社会環境
分野	D 悪臭等
ビジョン	健康で安心して暮らせるまち



成果指標の分析

悪臭の苦情件数は16件で、前年度に比べて6件の増となっている。増加している発生原因の主なものは、「農業」と「家庭生活」で、一時的、一過性の苦情が増加している。

成果が向上する余地（可能性）は？ 大 中 小

成果向上のためにすべきこと、次年度への取り組み方針

固定発生源からの苦情は増加していないため、一時的な苦情に対する啓発活動を推進する。